

アートを取り入れた都市の再生に関する事例研究

－モエレ沼公園の場合－

日大生産工（院）○ 中村 達久 日大生産工 日高 單也

1. 背景と目的

近年、世界では産業活動や秩序のない都市計画によって都市景観や自然景観が失われつつある。それに伴い、都市景観や自然景観を甦らせる活動として様々な都市再生への取り組みが行われている。その方法の一つとしてアートを取り入れた都市再生の事例が存在する。日本では、北海道札幌市のモエレ沼公園や石山緑地等が有名である。モエレ沼公園は札幌市を緑で囲む札幌市環状グリーンベルト構想^{注1}の拠点である。この公園はイサム・ノグチによって「大地全体をひとつの彫刻」¹⁾というコンセプトを基に、公園をひとつのアートとしてとらえ設計された。

本研究では、モエレ沼公園のアート・人・自然の関係を分析することで、アートを取り入れた都市再生の方法の一つとして見いだすことを目的とする。

本研究において使用される都市の再生とは失われつつある都市景観や自然景観を甦らせることと定義する。

2. モエレ沼公園の概要とイサム・ノグチ

2-1. モエレ沼公園

モエレ沼公園は、札幌市の中心部から約8km北東に位置する平野部にある188.8haの土地である。²⁾札幌市環状グリーンベルト構想の中で拠点公園と位置づけられ、1979年に公園の造成事業に先立ち、ゴミの埋立地としてスタートした。そして、ゴミの埋め立てが済んだ区域から公園の造成が始まった。また、札幌市は明治の開拓によって



図1. モエレ沼公園航空写真³⁾

繁栄してきた若い都市であることから歴史・文化が浅いため、芸術文化・事業に力を入れていた。このことから、1988年にイサム・ノグチが設計に着手しマスタープランが作られた。しかし、同年イサム・ノグチの急逝により、それ以降アーキテクトファイブが設計総括、ジョージ・サダオ監修によってイサム・ノグチのマスタープランを基に造成され、2005年にグランドオープンした。

2-2. イサム・ノグチ

イサム・ノグチ（1904-1988）は、世界的な彫刻家であり、モニュメントや噴水、広場、ランドスケープデザインなどジャンルを超えて幅広く活躍をした。1933年頃からのモエレ沼公園に取り入れられるプレイマウンテンなどの公共空間のデザインを考え始める。彫刻など芸術を公共空間に取り入れ社会に貢献したいという思いから、モエレ沼公園のマスタープランに着手した。モエレ沼公園は「大地全体をひとつの彫刻」というコンセプトを基に設計されたイサム・ノグチ最大の作品である。

3. モエレ沼公園の現状

モエレ沼公園は2009年現在において、表1から2002年グッドデザイン大賞、2003年札幌市都市景観、2006年全国都市再生まちづくり会議「まちづくり賞」、2007年日本クリエイション大賞「環境アート」などを受賞していることから、アートを取り入れた都市の再生の事例として注目を集めている。それにともない全国でも有名な札幌市の観光名所になっている。また、2003年「モエレファンクラブ」が設立された。「モエレファンクラブ」とはイサム・ノグチの「美しい空間によって人々の心を豊かにし、生活の中で役に立つ公園」という概念に賛同した人々によって、モエレ沼公園が多くの人々の憩い、訪れる公園として引き継がれる事を目的とし、活動を行っており、公園の活用や運営管理等に市民が自発的に加わり、様々なイベントに取り組む事によって、市民と行政の新しい協働と協創のまちづくりのモデルケースとなる事を目的とした団体である。⁴⁾ これらの他にもモエレ沼公園は様々なまちづくり活動を行っており、アートを用いたまちづくりの新たなモデルケースの1つとなっている。

表1. モエレ沼公園の来歴

1979年	ゴミの搬入・ゴミの埋め立て開始
1982年	公園の造成開始
1988年	イサム・ノグチがモエレ沼公園の設計着手、永眠
1989年	アーキテクトファイブ設計総括、ジョージサダオ監修
2002年	グッドデザイン大賞受賞
2003年	札幌市都市景観賞受賞
2005年	モエレ沼公園完成、グランドオープン
2006年	全国都市再生まちづくり会議「まちづくり賞」受賞
2007年	日本クリエイション大賞「環境アート」受賞

4. 研究の方法

本研究では、モエレ沼公園のアート（施設）がどのように水、石などのエレメントを取り入れているか分析し、アートが人間のどのような行為を誘発するか、公式ホームページ・参考文献を用いて分析・考察する。

本研究では、モエレ沼公園の施設をそれぞれアートと捉え、アートを構成する自然の素材をエレメントとし、分析の対象とする。

5. アートのエレメント

5-1. アートのエレメントの抽出・分析

本研究では、モエレ沼公園の特徴的な10個のアートを対象にして、エレメントを抽出し、分析した。テニスコート・野球場などのスポーツ施設は他の公園にも設置されていることからそれらを除外した。

①サクラの森（遊具エリア） [石・木・芝]

地面と遊具に「石」を取り入れている。遊具は一つ一つがイサム・ノグチの彫刻作品である。遊具エリアは7つのゾーンに分けられていて「木」、「芝」はそれらの遊具を囲むように植えられている。

②モエレビーチ [水・芝]

浅い池に「水」、地面にサンゴを取り入れている。「芝」がそれを囲んでいる。

③プレイマウンテン [石・芝・土]

高さ30m⁵⁾の山に「石」段、「芝」、「土」を取り入れている。ノグチ・イサムが1933年に構想し長年温め続けたアイディアである。

④テトラマウンド [石・水・光・土・芝]

土台に「石」、「水」を取り入れられている。ステンレス素材の四面を持つ三角錐と丘によって構成されている。ステンレスが太陽の「光」を輝かせ様々な表情を作る。丘に「土」、「芝」を取り入れている。

⑤ミュージックシェル [石]

半球形の建物は、前面が「石」のステージになっている。

⑥アクアプラザ、カナル [水・石]

噴水から溢れ出た「水」が、小川に流されている。地面に「石」を取り入れている。

⑦海の噴水、カラマツの森 [石・水・木]

噴水に「石」、「水」を取り入れられている。「木」が噴水を囲むように植えられている。

⑧ガラスのピラミッド [光・水・石]

ガラスが太陽の「光」を様々な形に変化させている。野外の噴水がある「水」。室内の壁や廊下に「石」を取り入れている。

⑨野外ステージ [芝・石]

地面に「芝」、「石」を取り入れている。

⑩モエレ山 [土・芝・石]

高さ62m⁶⁾ 山に「土」、「芝」を取り入れている。頂上の地面に「石」を取り入れている。

表2. エレメントの抽出

施設	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
石	○		○	○	○	○	○	○	○	○
水		○		○		○	○	○		
芝	○	○	○	○					○	○
土			○	○						○
木	○						○			
光				○				○		

アートからエレメントを抽出した結果、「石」が9作品、「芝」が6作品、「水」が5作品、「土」が3作品、「木」が3作品、「光」が2作品であった。

5-2. アートのエレメントの考察

表2の結果から「石」が9つのアートから抽出されたことから、設計者であるイサム・ノグチが「石」をアートの基本エレメントとして取り入れていることが読み取れる。「水」はモエレ沼公園を囲んでいる豊平川との調和をはかるだけでなく、噴水、ミストによって、様々な表情を演出している。③、④、⑤から「芝」、「土」の2つが取り入れられる場合、山、丘を表現することが考えられる。グリーンベルト構想の一貫であることから「芝」「木」が公園全体に取り込まれている。①、⑦から「木」で周りを囲むことで空間を強調していると考えられる。「光」はステンレスやガラスなど、人工物により変化をもたらし、様々な表情を表している。

6. アートにおける人の行為

6-1. アートにおける人の行為の抽出・分析

表3からアートで行われる人の行為を抽出した。「遊ぶ」が8作品、「休む」3作品、「登る」3作品、「眺める」が3作品、「泳ぐ」、「観賞する」、「パフォーマンス」が1作品ずつ抽出することが出来た。



①サクラの森(遊具エリア)



②モエレビーチ



③プレイマウンテン



④テトラマウンド



⑤ミュージックシェル



⑥アクアプラザ、カナール



⑦海の噴水、カラマツの森



⑧ガラスのピラミッド



⑨野外ステージ



⑩モエレ山

図2. アート(施設)⁵⁾

表3. アートと人の行為

(モエレ沼公園管理者からの聞き取り調査)

アート	人の行為
①	遊ぶ
②	遊ぶ、泳ぐ
③	遊ぶ、休む、眺める、登る
④	遊ぶ、眺める、登る
⑤	パフォーマンス
⑥	遊ぶ
⑦	観賞する
⑧	遊ぶ、休む
⑨	遊ぶ、休む
⑩	遊ぶ、眺める、登る

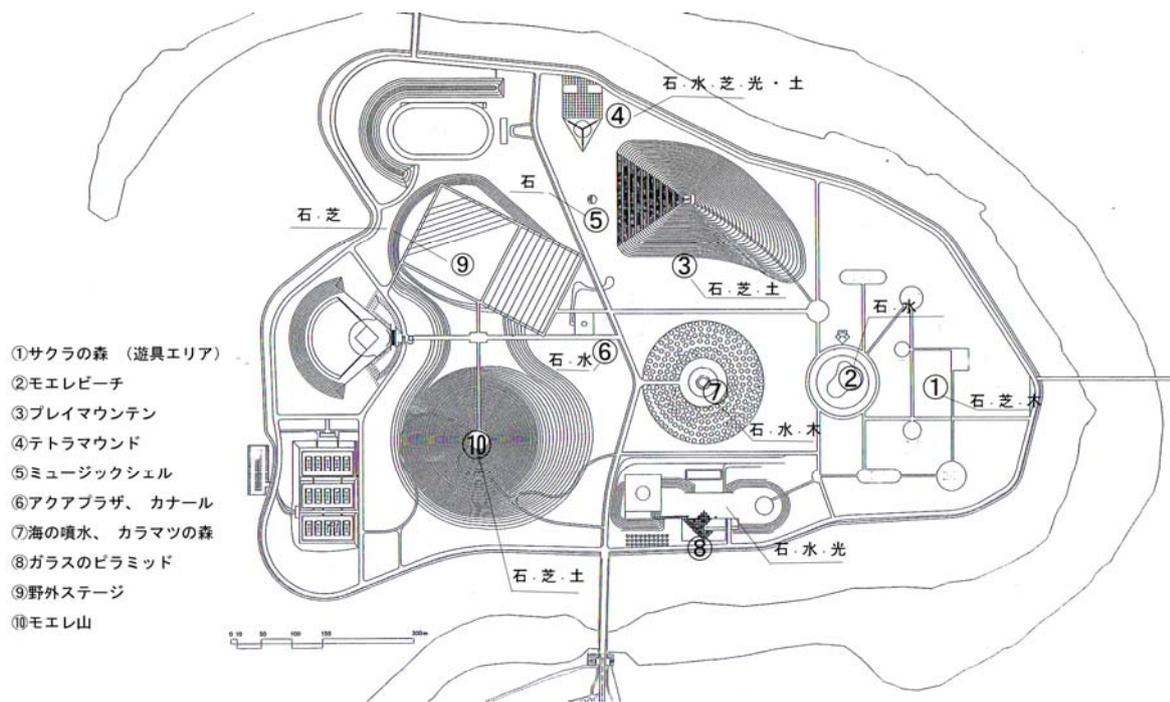


図3. モエレ沼公園配置図⁶⁾

6-2. アートにおける人の行為の考察

表3の結果から「遊ぶ」という行為が最も多く抽出された。このことから人はエレメントをもつアートで「遊ぶ」ことで、自然と関わりあっていると考えられる。「水」がエレメントである②では「泳ぐ」行為が行われ「土」、「芝」で山を表現した③、⑩では「登る」という行為が行われていることから、アートによって人の行為は誘発され、それによりアート・人・自然が関係していると読み取れる。

7. まとめ

イサム・ノグチが「大地全体をひとつの彫刻」というコンセプトで設計したモエレ沼公園は、そこにアートを取り入れたことにより、ゴミの埋立地という負の土地であった場所を、人々が生き生きと憩い集う場所に見事に変貌させている。全てのアートにエレメントがあり、そこは人が「遊ぶ」「休む」「登る」などの行為を自然と行っており、公園内においてそれぞれのエレメントは人々の行為を導く一要因として働いていたと考えられる。

また、人と自然が関わりを持つことで、人の自然に対する意識も高まるのではないかと考えら

れる。そのような結果からモエレ沼公園を、アートを取り入れた都市の再生の優れた1つの事例結果として得ることが出来たと考える。

8. 今後の課題

本研究では、モエレ沼公園を分析し、考察を行った。今後の研究では、石山緑地等の調査・分析を行いモエレ沼公園と他事例の比較分析を行うことが必要だと考えられる。

注) 札幌市環状グリーンベルト構想

自然的土地利用を活かしながら札幌の街を緑の帯で囲む計画

参考文献

- 1) 丸茂 喬, ランドスケープデザイン, マルモ出版, No.48, 2006年
- 2) 龍居 竹之介, 馬場 瑛八朗, 建築資料研究社, 庭, No.166, 2005年
- 3) 4) モエレ・ファン・クラブホームページ
<http://www.moerefan.com/top.html>
- 5) ①～⑩ モエレ沼公園公式ホームページ
<http://www.sapporo-park.or.jp/moere/index.php>
- 6) GA, No76, 2005